



緑爽会報 NO.127  
 '14年 4月25日 発行  
 公益社団法人  
 日本山岳会 緑爽会  
 ☎ 03-3261-4438  
 事務局 松本恒廣  
 夏原寿一 近藤雅幸  
 近藤 緑 川口章子  
 渡部温子 福原好子

小島烏水祭、深田祭、盛況裡に終わる

尾野益大四国支部長（緑爽会々員）から「第2回小島烏水祭が13日、烏水出身地の香川県高松市で開かれた。来賓、烏水の孫・曾孫、会員、一般参加者ら約110人が出席し、神事と記念式典を行った。今回から主催者が本部に、四国支部が主管者になった。森武昭会長らの挨拶の後、講演『山小屋のエネルギ―問題』、烏水碑の碑文を撰じた近藤信行氏からの祝電が披露された。引き続き出席者代表による献花、碑文の吟詠、合唱など



終了後支部会員による讃岐うどんの接待があったとの速報が寄せられた。4月例会「深田祭」速報は巻末報告は次号に掲載。

緑爽会総会のお知らせ

日時 5月22日(木) 13時30分～  
 (昼食の用意はありません)  
 場所 日本山岳会・会議室  
 議題 2013年度事業報告・決算報告  
 2014年度事業計画案・予算案  
 その他

終了後、吉田理一会員による講演「越後駒ヶ岳・駒の小屋管理人体験談」を予定しています。

同封の葉書で出欠をお知らせ下さい。

事務局

緑爽会 6月山行予告

日時 6月14日(出)  
 歴史と文学の街千葉県市川市散策  
 担当 渡部温子・川口章子



撮影 夏原寿一

「3月・羽村お花見会報告」

西谷 隆亘

今年の「はむら水と花のまつり」は前期・さくらまつり(3月27日〜4月13日)、後期・チューリップまつり(4月10日〜4月27日)である。昨年の羽村のサクラは、さくらまつりが始まったときには、既に散っていたので、今年の開花は、昨年よりは遅いことを期待していたが、余りにも遅く、3月29日頃に開花した。お花見会当日には桜は硬い蕾のままであった。4月6日過ぎに漸く花見頃となった。

お花見会当日は朝から小雨で、肌寒く、天気を気にしながら、参加者14名が羽村駅改札口に定刻に参集。駅にはわれわれの他、1グループしか見かけなかった。急いで予定のコースを歩くこととして、9時出発。区画整理の整っていない、ガランとした西口に出て、旧商店街を真っ直ぐに多摩川方向に向かい、新興多摩街道交差点を渡る。切り通しになっている、お寺坂に入り、左側の歩道を少し下ると、道路反対側に「馬の水飲み場」が見えるが、そのまま進み、坂の途中で左に入る道がある。中里介山の墓所への近道である。中里介山(1889-1954)は羽村の生まれで、長編小説「大菩薩峠」の作者である。民家の間の道を抜け、禅林寺の崖上の墓地に入り、介山の五輪塔の墓に参る。禅林寺の本堂裏へ続く階段を降りて、山門から禅林寺を辞す。山門を出て、左に進むと、大ケヤキのある奥多摩街道交差点に出る。交差点を渡ると、玉川上水の桜並木である。商工会の屋台店も準備中のように、賑わいは全然なし。天気が気になり、そのまま、堰下橋を渡り、右岸堤防を約70

0 m先の上流にある羽村市博物館に向かう。途中のサクラの蕾も小さくて、開花の気配はない。



東京都立羽村草花丘陵自然公園・浅間岳(253 m) 撮影：島田稔

羽村の自然、玉川上水、中里介山などの屋内展示、屋外展示の旧下田家住宅を小一時間ほど見学。裏山の浅間岳(235 m)へ登る。途中、羽村神社に立ち寄り、青梅市、羽村市、福生市、瑞穂町、狭山丘陵などを遠望するも、筑波山やスカイツリーは残念ながら見えず。眼下の多摩川の流れは左岸の阿蘇神社の方から右岸の浅間岳の方に向かい、そこから反転して、左岸の取水口に流れ込んで、取水し易くなっているのがよくわかる。荒井正人さんによると、このように地形を利用した先人の知恵が『多摩検定』に出題されたことがあるとのこと。早々に約30 m先の浅間岳頂上に向かう。ここも眺望は悪く、残念ながら富士山は見えない。天気が心配ですぐに下山。左岸に戻り、取水堰の傍らで堰を見下ろしている玉川兄弟の像の横を通り、上流の大正土手の桜並木を阿蘇神社の鳥居まで行く。途中、1本だけ小振りの満開のサクラがあったのは、僥倖であった。神社境内の川原のサクラの蕾も未だ固い。阿蘇神社は端折り、至近距離にある根掘



東京都羽村市 根搦らみ前 一峰院本堂前にて 撮影：島田稔

らみ前の臨濟宗の古刹、一峰院に寄り、江戸時代末期に建立された鐘樓門や境内を觀賞する。昼食も摂らずに急いで歩いたので、お腹も空いてしまった。根搦らみ前の水田はもう少し経つとパンフレットの案内のようにチュールリップ畑となり、綺麗な花で飾られる筈だが、花見には少し早く、天氣に恵まれない今日は早めに引き揚げることにして、漸く1時過ぎに我が家に着いて、歓談する。緑爽会会員・田邊壽さんから美味しい和菓子などお心尽しの品が届いていて、一同感激。田邊さんへのハガキに各自一筆、寄せ書き。帰りは、往きに天氣が気になって、端折った羽村駅東口の「まいまい井戸」を覗いて、解散になった。

計15名  
係 西谷隆亘

〔参加者〕 梨羽時春、松本恒廣・弘子夫妻、渡部温子、鳥橋祥子、大島洋子、島田稔、夏原寿一、瀬戸英隆、川口章子、深田森太郎、荒井正人、手塚てる子、西谷可江

行程：JR青梅線羽村駅↓（お寺坂）馬の水飲み場↓中里介山の墓（禪林寺）↓大げやき（羽村橋）↓玉川上水桜並木↓堰下橋↓多摩川右岸土手↓羽村市郷土博物館↓羽村神社↓浅間岳（355m）↓：（往路と同じ）↓堰下橋↓玉川兄弟の像↓東京都水道局羽村取水所・羽村陣屋跡・玉川神社↓多摩川左岸土手（大正土手）羽村水上公園桜並木↓阿蘇神社鳥居↓根搦らみ前水田（チュールリップ畑）↓一峰院↓……↓まいまい井戸↓羽村駅

（丁）

西谷家で宴のひととき  
緑爽会報126号の田邊さん、西谷ご夫妻の奥多摩、多摩川を紹介された文を読み、雨中止とあつたが雨でも独りで歩こうと出かけたが、駅に着くとすでにみなが集まっていた、皆同じ思いで参加されたのだと嬉しくなりました。

西谷さんが、お花見の日程に心を砕いてくださったのに雨、桜は硬い蕾だとすまなそうに話された後、「雨の下でのお昼ではと、うちで食べてもらおうと思っっています」と言われた。

予定のコースを案内して頂き西谷家に向かうと、西谷夫人が表で待っていてくださり、挨拶もそこそこにお座敷に入って一同思わず歓声をあげました。

春の宴のしつらえが見事に整えられていました。

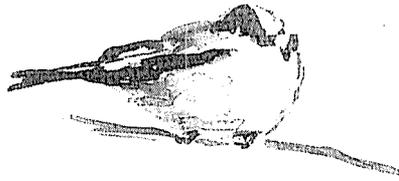
おこころづくしの煮物、果物、和菓子が織部焼き、漆器に盛られ、いろいろ取り揃えられて、勧められるままに頂き、杯を重ね、宴が盛り上がりました。

その上に、大先輩の田邊さんが稲荷ずし、干瓢巻きの串天、草餅を届けてくださったとい

翠柏狂歌雑詠2014 (続)

羽賀 克己

・腰を越え胸に逆巻く激流で浚われかけて渡渉諦む  
・倒木を集めて焚けば燃え盛る火の粉は杉の梢を越えて  
・岩陰で不時露営した若き日の厳冬期屋久の深雪憶う  
・死線越え生きて還れた恵みには娘二人がこの世の人に  
・孫達よ君らの父母も記念にと縄文杉に逢うて来たのだ  
・縄文の杉の古木は枯れるとも輪廻巡るが自然の摂理  
・千年の杉もやがては枯れ果つも屋久の自然は永久に輪廻す  
・世の常とやがて去りゆく命から子孫に伝えむ確かな未来  
・そのことを孫に伝えむ吾が命大地に還るその時まで  
・脈絡もなく浮かび来る冬山は飯豊神社の合宿籠城  
・あの時は丈余の雪が吹き飛びて一夜で凍った地面の裸出  
・熟睡し目覚め朝かと降りて見りや妻はこれから風呂に入ると  
・週末に農作業しに行く妻を今日は明るく見送りましょう  
・吾が心少し変えれば日常も明るく楽しく生き得ると知る



カット及び山の絵 中村好至恵

対談資料

一日本山岳会ルームの変遷一

- お茶ノ水 1948 (S23) 年 再建決定 千代田区神田駿河台4-6  
1949 (S24) 年 竣工 3月10日  
会長 武田久吉/榎有恒/別宮貞俊/日高信六郎/松方三郎
- 外苑コーポ 1964 (S39) 年 7月引っ越し 渋谷区神宮前3-31  
会長 松方三郎
- 向井ビル 1967 (S42) 年 6月引っ越し 千代田区錦町3-32  
会長 三田幸夫
- 湯島さくらビル 1973 (S48) 年 4月引っ越し 文京区湯島1-6-1  
会長 今西錦司/西堀栄三郎
- 四番町 1978 (S53) 年 1月引っ越し 千代田区四番町5-4  
会長 西堀栄三郎/佐々保雄/今西寿雄/山田二郎/藤平正夫/村木潤次郎/斎藤惇生/大塚博美……2014 (H26)



# お茶の水ルーム時代の思い出

山本 良子 山口 節子

松本恒廣 私が百年史の委員をしていた時、歴代の山岳会事務所の話を纏めていたら、戦後はお茶の水のニコライ堂の前にルームがあったことを知りました。我々にとっては、知らない時代の話なので、この頃をご存じの早川瑠璃子さんにお話していただこうとお願いをしていましたところ、突然のご不幸がありました。

そこで、企画した対談を実行したいと思い、今日は緑爽会の山口節子(会員番号4475)さん、山本良子(4704)さんのお二人にお話を伺うことにしました。どうぞよろしくお願いいたします。

## ●山本良子

実はこのお話があったのは昨年(2019)のことです、日本山岳会は年功序列ならぬ会員番号序列で4719番の早川さんと私にということでした。なぜ私より先輩の山口節子さんでなかったかといいますが、山口さんはとてもシャイな方で、緑爽会とは親しい方ではあるのですが、「私は古さを誇るの嫌だ」と会員名簿にも載せておられなかったのです。早川さんと私にお話がきたのです。山口さんは、愛称をミルキーというのですが、過去いろいろと山岳会のためにご尽力なさってこられた方です。今



日は「やっぱりあなたの出番よ」と背中を押して来てもらいました。

そのことをまず申し上げたいと思います。私が入会したのは、1958年4月、2008年に50年たったと永年会員になり、今日に至っています。

## お茶の水にルームがあった頃

まず初めに、ルームとは何だろうか？百年史に書かれているのを引用します。

——独立した山小屋風のクラブルーム。東

京都千代田区駿河台4の6は、玄関から入って左側に9坪の図書室があり、ガラス戸で南面前庭のベランダに出入りできた。図書室の東と北側には壁面一杯に天井まで続く書棚が取り付けられていて、玄関の右側は手洗い、物置、台所、管理者の居室となっていた。居室と玄関の上部の屋根裏を間仕切りした約5坪を畳敷きとして地方からの来室者が寝袋で泊れるようになっていたが、2年後には専用の談話室に改造され、毎週土曜日にはクラブライフを楽しむ土曜会の会場となった。と纏められています。

私の印象でも本当に山小屋でした。木のベンチと低い小さなテーブルが置かれて、皆さん膝付き合わせて集まっていました。私が入会したときの会長は別宮(貞俊)さんでしたが1958年の国体の直後亡くなられ、続く日高(信六郎)さん、松方(三郎)さん、皆さん錚錚たる紳士方でした。20代初めの、あまり言いたくない言葉ですが、女性というより小娘だった私たちも一緒に山の話をしたり、聞いたりしたことを今も懐かしく思い出します。

場所はお茶の水聖橋の近く、岸体育館の敷地の中になりました。建物は木造で、床がミシミシいう所もあったような記憶があります。

ります。

中でも記憶に残っている方は橋本龍太郎さんのお父様の橋本龍伍さん。足がお悪かったので、杖を突いて来られてベンチに座っていらした。もう一つは当時の紳士方は煙草がお好きで、「山屋はパイプ」という一種のカッコ付け？もあったのでしようか、部屋中にパイプの煙が満ち満ちていました。

## 山の装備について

山の装備には共同装備と個人装備がありますが、共同装備で一番思い出すのはテントのことです。

その頃でも八ヶ岳は山小屋岳と言われるくらい小屋がありました。それ以外の所は少なく、山へ行くには、どうしてもテントを持って行かなくてはならなかったですね。

テントといえば、まさに使用前、使用后という言葉がぴったりするように、使用前はきちんと畳めていますが、撤収後は、たとえ雨が降らなくても霧・露で水分を含み、素材が木綿ですから、ずっしり重くなり、畳みにくくなって担ぐのが大変でした。共同装備を分担するときは、出来れば撤収後のテントには当りたくないけれど、順番で担ぎました。

テントは木綿、ポールもペグも木だったのが、ポールもアルミに代わるなど、どんどん軽くなりました。

当時、ヤッケはありましたが、ウィンドヤッケで防風着・防寒着で、雨着はゴム引きでした。山で雨に会うと上からより下から吹き上げられることが多かったので、大変な思いをした経験があります。今でも特に足元はオーバーにケアする癖がついています。

昔はテントの中でラジオを聞きながら天気図を書くのが当たり前でした。考えてみたら

古き良き

時代、一から勉強できた良き時代だと思っています。

また、

山日記が当時の必需品で、

山日記を書きながら、歌を唄ったりしました。

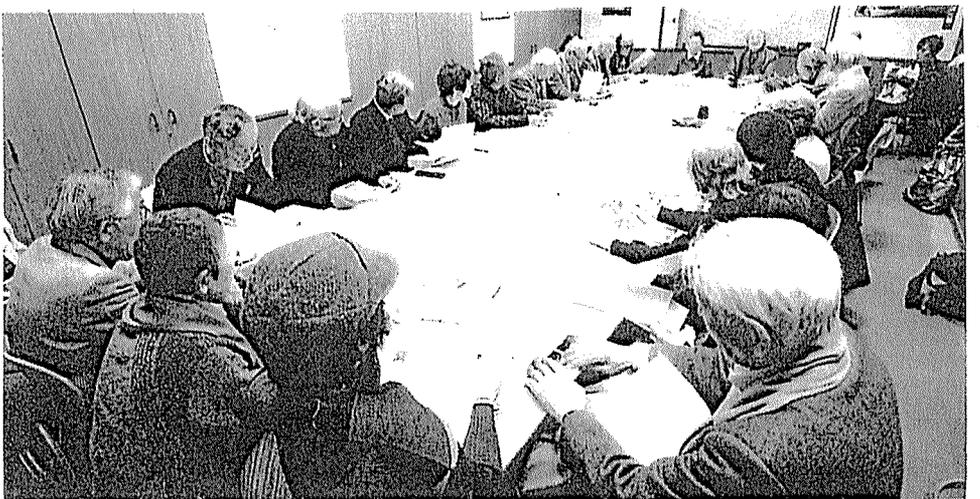
リュックも勿論、木綿です。アタック

ザックを除けば、ほとんどがキスリングでした。木綿の帆布に防水をしようと蠟を溶かして塗り、ただでさえ重いザックが更に重くなり、ウェアも入れると10貫にもなりまして、それくらい背負うのは当り前。それで山が歩けるかというと、火事場のなんとやらと同じ

山力かなと思います。

山靴で困ったのはナイゲル。鋳靴なので、駅の階段で困りました。当時は女性用のサイズの靴はなくて、頼んで探して貰い、足しげく通って買いました。私は山岳会に入ったのを機会に、ビブラムの靴を初めてオーダーしました。

懐中電灯も無く、自転車で使われている黒い箱型の電灯を提げて歩きました。



撮影 小泉義彦

食料品は、茶袋が重宝しました。その後、アメリカからタッパーウェアの卵のケースが入ってきて、生卵を山に持って行けるようになりまして。当時、コンビーフ・鮭缶は必需品でした。

● 山口節子

ルームでお会いした方々のこと

私が入会したのは昭和31年、22歳のときでした。山本さんが話されたように、山で着るものなどは、すべて自分で作りました。目出帽は先輩のラクダの腹巻を黒に染めて作り、



ヤッケの裏に落下傘の絹布を付けたり、ピッケルも借りた門田を後で貰い受けたり、スパッツは無いので、ゲートルを半分切っただけで済ませました。

お茶の水のルームは、私が入会して何年かで終りましたが、思い出すのはこの部屋（JAC会議室）より狭い所に、真ん中に大きなテーブルがあり、周りは全部ベンチで、理事会や委員会があるとそこに横（有恒）さん、三田（幸夫）さん、松方（三郎）さん、女性（村井（米子）さん、坂倉（登喜子）さん、川森（左智子）さん）たちで、皆さんが座られるともうびっしりであるに出られない。パイプと葉巻の煙でもうもうとしていました。私たちは、恐ろしくお話しの中には入れませんので、お茶を入れたりしながら、偉い方々のお話を聞いていました。

昭和31年といえはマナスル初登頂が終わ

ったばかりで、日本山岳会は飛ぶ鳥を落とす勢いでした。

やがてお茶の水のルームがあつた岸体育館の土地を日立が買い、ビルが建つというので追い出されて移転した先が外苑コーポ。ここははじめじめした地下で、この時の会長が松方さんでした。

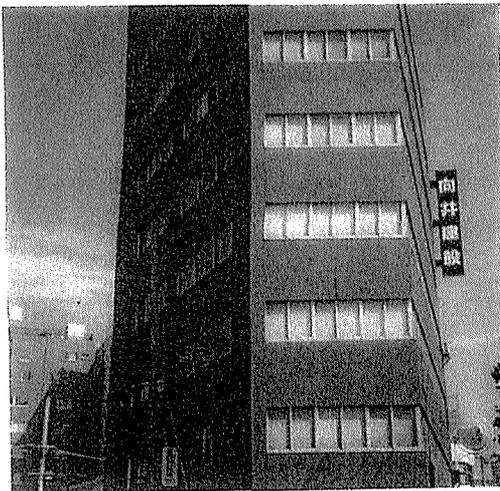
松方さんは、ほんとうにユニークな方で、ルームに見える時も、夏はよれよれの短パンに古ぼけたリュックで、とても松方公爵家の御曹司とは見えなかつたですね。でもとてもチャーミングで素敵な方でした。外国の方が見えてホテルで歓迎のレセプションがある時も、雨降りだとデイズニーのミッキーマウスの付いた黄色い傘で、「これだと人に間違えられないからいいんだよ」と言っておられた。生れと育ちがいいからでしょうね。

当時、ルームに入入りされておられたのは、殆ど後に名誉会員になられた方々でした。

丁度東京オリンピックの時期で、昼間は競技場の喧騒が聞こえて来ましたが、夜になれば竹下通りは真つ暗で、人っ子一人通らない時代でした。理事会の後は、近くのバーに移つてたむろしてました。晩餐会なども今のようになつた場所ではないのでなくて、あちこちで開催していたと思います。

ベルリンオリンピックのマラソンランナーでスキーの選手でもあつた麻生武治さんをご存じでしょうか。もう亡くなられましたが、ヨーロッパに永くいらしたので、外国語が堪能な方でした。晩餐会で「麻生、なんか話せよ」と言われて「ウン、英語でやるか、ドイツ語でやるか」と言つて、イタリア語で話されたのを、みんなわからないままで聞いていました（笑い）。面白い方でした。

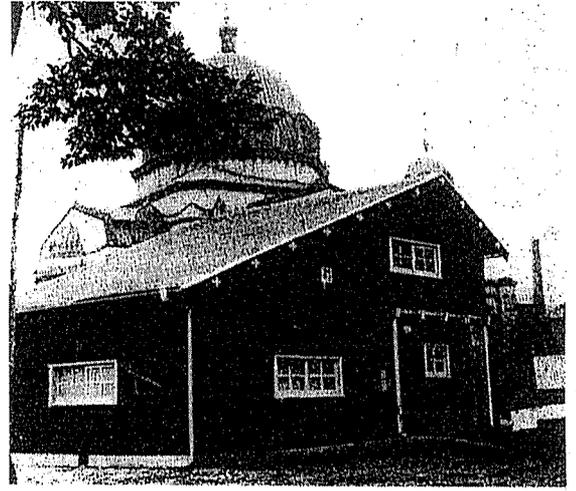
六義園で有志談話会が開かれましたが、錚



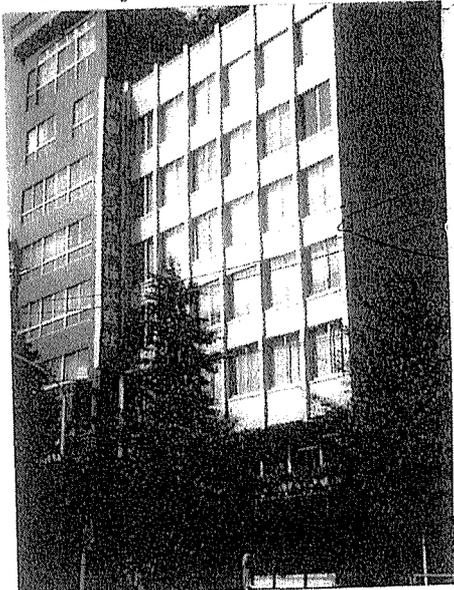
1967 (昭和42) 年、神田錦町の「向井ビル」 MUKAI Bldg. in Kanda in 1967



1940 (昭和15) 年秋、日本山岳会の虎の門ルームで、会報の編集会議 An editorial meeting in the club room in TORANOMON in the autumn of 1940



1949 (昭和24) 年ごろの神田、御茶の水のルーム The club room in OCYANOMIZU around 1949



1973 (昭和48) 年、文京区湯島の「さくらビル」の外観 SAKURA Bldg. in Yushima in 1973



会報第1号は1930 (昭和5) 年10月に発行。当時は「山」のネーミングはなく、ただの「会報」 The first issue of the newsletter



登山の便覧、教科書、辞書と読み物を兼ねた『山日記』。1930 (昭和5) 年に創刊 "YAMA-NIKKI", the first issue in 1930



1964 (昭和39) 年8月19日、東京・渋谷の外苑コーポでの開設記念パーティ。車座には、松方三郎、日高信六郎、神谷恭らの顔が見える Opening party in the club room at GAIEN-COOP, Shibuya on August 19, 1964

山岳会ルームは、それぞれの時代のなかでクラブライフを楽しむ拠点となった。創立当初は、会員宅を持ちまわりで使用していたが、1829 (昭和4) 年、東京市芝区虎の門琴平町の不二家ビルに集会室兼図書室を開設。

1933 (昭和8) 年、事務所を虎の門図書室に移転する。戦時中、空襲で虎の門事務所が焼失……

「写真で見る日本山岳会の100年」より転載。

錚たるメンバーが揃うので、恐ろしくて近づけませんでした。それなのに、なぜ2回も私が行ったかというと、たまたま幹事だった坂倉さん、川森さんから「手伝って」と言われたからです。さっそく「中学生かい」と言われてしまった(笑い)。武田久吉さんは、六義園の豊富な植物を解説されていました。

田部重治さんが「私は山登りを戦後始めまして」と言われて、皆が「え!」と驚いたら、なんと日清戦争のことだったのでした。当時はまだ山岳会創立当時の方々が多かったので、後に会長になられる方々もまだ若くて小さくなっておられました。私はたまたま恐ろしくて、なんでこんなところに来ちゃったんだろうとばかり思っていました。

原宿時代から婦人部が活動を始めて、1969年9月女子の指導者研修会を立山で行いました。立山のビクターセンターの上にある立派な研修センターです。そこで大学のリーダークラスの研修を毎年やっていました。女子はお呼びでなかった。村井さんが「なぜ女子の研修をしないのか」と文部省に捻じ込んだのです。文部省ではどうしていいかわからないので、山岳会に「やってくれ」ということで、山岳会と文部省共催で初めて開催されたのです。講師は楨さんはじめ素晴らしいメンバーでした。

その年は北アルプスに大洪水があつて、黒部ダムが倒木で覆われてしまった。富山地鉄がダメになって、タクシーカトラックをチャーターして行くしかなかったのですが、全国から43名の受講生が集まり、4日間の研修で剣に登りました。実技の講師はマナスル帰りとかヒマルチュリ帰りのすごい布陣でした。翌年は台風に会い、剣沢でテントを張っていたらポールは折れるし、テントは飛ばされ

るし、凄かった。

目の前の研修所(前進基地)に逃げ込

みたくて

も、山崎

安治さん

が「テン

トを死守

しろ」と、

ゼツタイ

入れてく

れなくて、

みんなず

ぶ濡れに

なって大

変でした。

でも、そ

うやって、

少しずつ

女子もレ

ベルアップしたんじゃないでしょうか。

山岳会をめぐる内外の友人との交遊

その後、外苑コーポのルームはあまりにひ

どいというので錦町に移りました。この時期

に、松方隊長でエベレストに行っています。

スキー隊と一緒にということで喧々諤々だった

のを覚えています。

1970年、宮崎英子さん達が女性だけで

アンナプルナに行っています。

山岳会としては、1968年に日印合同で

カイルスピークに行きました。インドが6人、

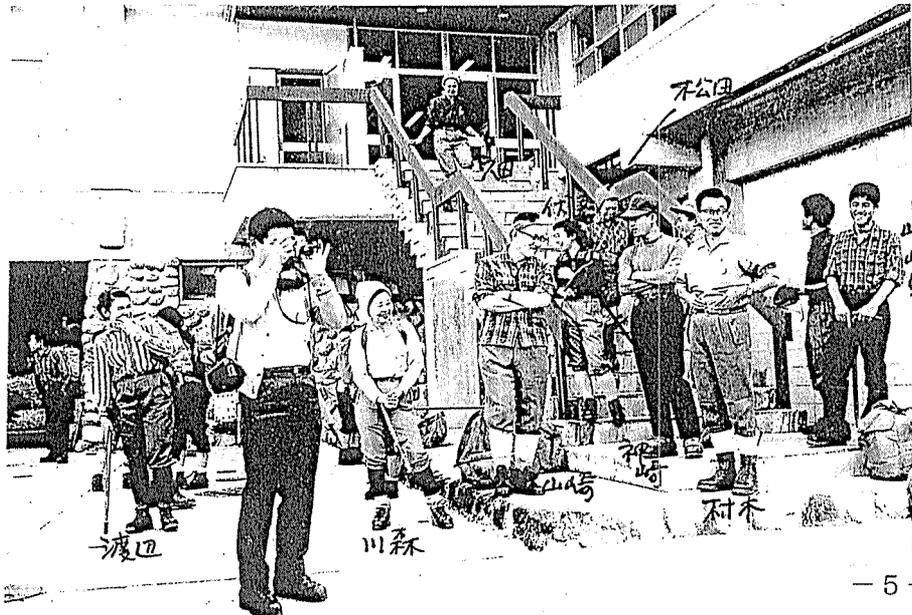
日本人が4人登ったのですが、雪崩でシェル

パ1人を失いました。



### 女子登山指導者研修会

於・立山登山研修所  
1969.9.20~23



1970年の大阪万博の折、ヒラリーさんがニュージールランド館で講演されるために来日。奥さんのルイーズさんは素敵な方で、吉沢（一郎）さんが立山へご案内し、私も富士山にお伴しました。みんな重装備で来ていたのに、ニュージールランド風に短パンで登られました。その後、ネパールでの飛行機事故でルイーズさんとお嬢さんが亡くなりました。「あ、ヒラリーさんが駄目になっちゃう」と心配していたら、それから2年くらいは落ち込んでしまわれ、その後立ち直りましたが、悲しい思い出です。

話は戻りますが、山岳会で冬山の研修を富士山でやっていました。吉田口から歩いて、今では雪崩で飛ばされてしまった五合目にあった芙蓉荘をベースにして雪上訓練をしました。講師はマナスルの方々でした。女性の参加は10人くらい。佐藤（遠藤）京子さんが来ていましたが、角瓶1本空けてしまうので驚きました。今も元気でヒマヤン・グリーンクラブをなさっている凄人です。

先程、山本さんから山日記のお話がありました。山岳会が毎年発行している昔は若狭堂のドル箱だったのですが、だんだん売れなくなつて廃止になった。最初の頃は薄くて、モノクロで高山植物の絵が描いてあった。山下一男さんが描いていて「持っておいで」と言つて毎年絵具で色を塗つてくださった。今も大事にとつてあります。

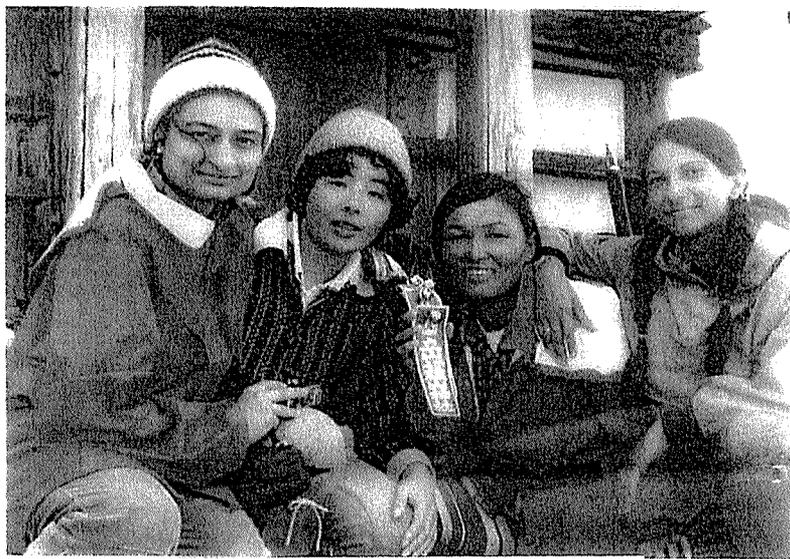
女子は数が少なかったから、顔を覚えられてトクでしたね。名誉会員とか、偉い人たちにも声をかけて頂いたりして、嬉しかった。特に早川瑠璃子さんは美人だったから。早川さんは旧姓磯崎さんで、結婚してからご主人のお母様の介護で17年間も山に行けなかった。だからダンナは彼女に頭が上がりなくて、

瑠璃子さんは好きなことができたわけ。向井ビルから湯島のさくらビルに移つた頃、ナンダデビの縦走を青年部が、カメットに婦人が出かけました。山岳会としてはありませんが、1975年に田部井淳子さんがエベレストに登りました。

面白かったのは、慶応の小屋が五色沼にあつて、呉服橋にマナスルのドクターの辰沼廣吉先生の病院があつて夜行バスがその前に着く。そこで飲み始めると、出てくるコップは検尿用のコップなんです。慶応の小屋は一度焼失しているので、火に厳しかった。水も雪を溶かして使い、金坂（一郎）さんや小原晴子さんのご主人の勝郎さんがお茶碗を洗うのですが、小原さんの洗い方は汚くて。辰沼先生は絵が上手で、裸婦を描いて「小原晴子さんのヌードです」と言つておなかにバツテンのおへそを付けたりして大笑いでした。ほんとは楽しかった。クラブライフを満喫していましたね。

私たちの仲間に三枝礼子さんと言う女性がいます。阪大のP29に遠征して以来、ネパールが気に入つて日本・ネパール辞書を作りました。3万5千円もして、あまり売れないみたい。でも大学書林が、地球上の言語の辞書を全部作りたいと続けているようです。日ネとネ日の両方を作つて、今は大阪にいますが、よく電話がかかってくる。

1980年、婦人がケダルナートに遠征。大久保春美さんたちです。堀井昌子さんが入会して一緒に行きました。インドのラマちゃんも一緒でした。結構面白かつたようで、今でも仲がいいですね。その後、カメットに一緒に行ったインド人たちが3人を日本に招いて穂高と剣に登りました。立山の登山研修所を使わせてもらいました。



立山頂上 インドの3人と麻生由紀子さん

3人は大阪に行けばマナスルの今西寿雄さんのお宅に泊めて頂いたり、逗子の小原さんのところに宿泊させてもらったり。中には海を知らない人もいて、クラゲに刺されていました。

遠征というとき長く極限状態にいますから、よく喧嘩して帰つてくると聞きますが、山岳会にはそういう話は殆どない。この隊も仲がよくて、4年前には30周年をしました。

1988年に田部井さんが隊長でインドヒマラヤのシバに行きましたが、気候が悪く、大雨で一時連絡が途絶えて大騒ぎになったことがありました。

鳥海山にはよく登りました。深田久弥さんの奥さん、佐藤テルさんなど大勢で行つたことがあります。

岡部みち子さんが鳥海山の麓に住んでいました。山小屋をやりたいと言つて行つたのですが、鳥海山の噴火で断念して吹浦に住み着いたのです。デオ・チバに行つたお医者さんの杉浦耀子（現マレン）さんの義母さん、フ

ランスも一緒でした。日が暮れて日本海に太陽が落ちるとき、岡部さんが「ジュツというみたいでしょ」と言つたのを覚えています。山形支部の小松（良三）さんの小屋をお借りして快適でした。

山本良子 先程の登山研修所のことなのですが、文部省主催女性登山指導者講習会という長い名前でした。修了書が文部省から出ました。

講習会はいろあつて、富士山ではスキー講習会もあつた。当時は交通手段としてトラックを止めて乗せてもらった。そのお礼として煙草を一人3箱ずつ割り振つて持つて行くことにしていました。「煙草でお願いします」と言つて乗せてもらったんです。

とにかく、今日皆さまの前で、このようにして昔のお話が出来たことを大変幸せに思つております。

松本恒廣 貴重なお話をどうも有難うございました。（記録・川口章子 協力・近藤緑）

後記 4月20日(日)に深田さんが亡くなられた茅ヶ岳山麓にある深田公園での深田祭に参加してきました。近くに出来たサーキット場の爆音と、病人搬送のために飛来したヘリの騒音とでその賑やかさは格別でした。女岩手前まで往復。13時30分からの神前祭では市長、白鳳会、JAC山梨支部、深田クラブの順で献花、最後に緑爽会も深田森太郎会員が代表して献花しました。出席者は松本恒廣・里見清子・夏原寿一・川口章子・深田森太郎・西谷隆亘・西谷可江／小池興四郎・中里律子・松本弘子 計10名。（松本恒廣）

★またまた多くの方のご協力で会報を出すことが出来ました。感謝しています。（近藤緑）